要求運動の要（かなめ）
新婦人、大きく

千葉・館山支部

千葉県の南端にある館山（たてやま）支部は、館山市と南房総市の二つの行政区にまたがっています。南房総市の地域で仲間をふやし、5月に新しい班ができました。

学校給食費2カ月分無料が実現！

7町村が合併してできた南房総市にあるおひさま班とはまゆう班は、国保病院の存続、核兵器禁止条約の批准・参加を国に求める行動や給食費値上げ反対など地域のさまざまな運動の要となって、とりくんできました。

南房総市では2024年、国からの学校給食費支援の交付金を給食費支援には使わず、給食費の値上げを市長が発表。「値上げをしないと必要な栄養素が取れず、体力や学力に影響を及ぼす…」の説明文書に、サイズが半分になったハンバーグや具のないスープの写真を添付して保護者に配りました。このような脅しまがいのやり方で値上げを強要する市の姿勢を知った会員たちは怒り心頭！

40代の会員が作り方を調べた折り紙の「こいのぼり」をみんなで作った（ゆず班）

2つの班を中心に「給食費値上げ中止を求める市民の会」を立ち上げ、議会請願と市長・教育長あての要請署名活動にとりくみました。署名を集めた保護者からは、「あんな写真を見せられたら怖くて値上げに同意せざるを得なかった」「私たちの代わりにがんばってくれてありがとうございます」との声が寄せられました。

結果として値上げは強行されてしまいましたが、25年度になり、追加の交付金が出たとき、市は9月からの給食費を2カ月分のみ無料に。「運動が反映されたのであればうれしい」と話し合いました。

26年4月から、国による小学校の給食費の無償化がスタートし、私たちの長年の運動が国を動かしたことを喜び合いました。

また、平和の運動でも、2つの班が協力して他団体や個人に呼びかけ、核兵器禁止条約の批准・参加を求める国への意見書をあげる請願書を昨年12月市議会に提出。結果は残念ながら否決でしたが、全議員と面談する中で、「核なき世界を望む」ことでは誰も異論がないことを確認できました。

署名に協力した女性が入会

行政に対する要求運動をさらにすすめるためにも南房総市での支部結成をめざし、新婦人の仲間を増やそうと話し合ってきました。この間、読者を会員に迎えたり、学校給食費値上げ反対署名に協力した80代の女性を会員に迎えることができ、「一人暮らしで人と話さない日もある。おしゃべりできる場所があってうれしい」と話します。

おひさま班の班会で「近くで集まりたい」と声があがりました。試行期間を経て今年5月、おひさま班から独立し、ゆず班を結成。班会ではしんぶんタイムや近況報告などを大事にしています。「この間まで、体調がよくなかったけど…」「今度、一緒にうたごえに行かない？」などおしゃべりがはずみ、何でも話せるような関係に。班会が会員たちの居場所になっています。

地域ごとに班で集まるようになり、会員から「ゲストを誘いやすくなった」の声も。知人を班会にも誘って仲間を増やしていきたいと話しています。

主張

6月23日は、沖縄慰霊の日です。81年前のこの日、旧日本軍と米軍による組織的な戦闘が終結したとされています。住民を巻き込んだ地上戦で20万人を超える命が失われ、県民の4人に1人が犠牲になりました。多くの尊い命の犠牲の上に築かれてきた、戦後の沖縄。「二度と戦争を繰り返してはならない」「命こそ宝（ぬちどぅたから）」という願いは、戦後80年以上たった今も、変わることなく受け継がれています。

しかし、その沖縄には米軍基地が集中し、政府は度重なる「基地はいらない」の民意を無視して、完成の見込みのない辺野古新基地建設という無謀な工事を強行しています。南西諸島では自衛隊の増強やミサイル基地化が加速し、米兵による性犯罪も深刻です。加えて、米軍基地由来とみられる有害物質「PFAS」による水源汚染により、「地元の水道水が安心して飲めない」という異常事態まで起きています。日米地位協定の壁に阻まれて立ち入り調査すらできない現状は、あまりにも理不尽です。

沖縄県知事選勝利へ
全国から連帯を

こうしたなかで沖縄県知事選挙（8月27日告示、9月13日投票）がおこなわれます。この選挙で問われるのは沖縄だけでなく、日本社会全体にかかわる課題です。

沖縄県本部では、デニー知事3期目勝利をめざして連続学習会を開催し、街頭スタンディングや9条署名で対話を広げています。沖縄にいる家族、親戚、知人、友人への呼びかけをはじめ、現地への駆けつけ支援や募金、SNSでの発信など、全国から支援を広げましょう。

（関連記事2面）

〈月1回〉

東京電力福島第一原発事故　あの日から15年　⑥

浪江町民　門馬昌子

浪江町では、海に近い塩部（しお）落に水素工場ができ、役場の近くに無印良品の入った「道の駅」ができた。飲食店は少しずつ戻りつつあるが、懐かしい風景は消えてしまった。2026年4月末時点で浪江の人口は2482人だが、被災前には21000人だったから11%強しか住んでいない。しかも、元の住民ではない作業員の数も含んでの数だ。

ただ一つの救いは、請戸（うけど）浜にあった酒造店が避難先の山形県で酒造りを続け、浪江の米と水を使って10年前と同じ味の酒を作り上げたことだ。その酒は「ただいま」との銘で、道の駅の隣に建てた店で銘酒「磐城壽（いわきことぶき）」と売られている。この酒造店の主人は「復興というのは、元の生業が戻ることだ」と言ったが、その通りだと思う。店の隣には大堀相馬焼（おおぼりそうまやき）の店もでき陶芸教室も始めたというので、私もまたコーヒーカップを作ってみたいと思っている。

浪江の自宅2階で。資料や書籍が並ぶ

全ての原発を廃炉に

さて、これからの私は、二十数人いた友達は皆避難先に落ち着いてしまって、浪江には戻らない。私も友人たちがいない浪江に戻ってもうつ病になってしまうだろう。しかし、夫と娘の思い出の詰まったわが家を壊す気にはなれない。私設の「原発被災と反原発運動の記念館」にしようと思う。懐かしい浪江町がなくなるのは悲しい。だから、住民票は移さずに固定資産税、水道料、健康保険税を町に払い、月に一度は帰って浪江の空気を吸ってくるつもりだ。

あと10年はこうした生活を続けたいから元気でいたい。筋トレに通い、声が出なくならないよう、すぐ近くの隅田川の岸でスマホを片手に倍賞千恵子の歌を1時間くらい歌っている。60代、70代の人たちの食事会にも関わり、歌詞カードを作ったりピアノの伴奏を担当。少しでも役に立つことをしていくつもりだ。

4月に浪江に帰った時、山並みにずらりと並ぶ風力発電が見えた。多くの人にぜひ再生可能エネルギーの電力を使ってもらいたいと思う。さらに、私のような原発避難民を出すことがないように日本にあるすべての原発を廃炉にしたい。